≪2022年1月公開サロン（通算303回）報告≫

＊＊＊

試合中におけるレフェリーの安全管理

小幡 真一郎（元・サッカー国際審判員）
谷口　弘（日本ラグビー協会技術部門レフェリーコーチング普及リーダー）

＊＊＊

【日　時】2022年1月26日（水）19：30〜21：30（終了後はオンライン懇親会　〜23：30）
【会　場】オンライン（Zoom）
【テーマ】試合中におけるレフェリーの安全管理
【演　者】小幡 真一郎（元・サッカー国際審判員）
　　谷口　弘（日本ラグビー協会 技術部門　レフェリーコーチング普及リーダー）
【コーディネーター】嶋崎雅規（NPO法人サロン2002理事／国際武道大学）
【参加者（サロンファミリー）14名】★はNPO会員
★安藤裕一(GMSSヒューマンラボ／医師）、小幡真一郎（元・サッカー国際審判員）、北原由（高校サッカー指導者）、小池靖（在さいたま市サッカースポーツ少年団指導者）、小松章一（東京都サッカー協会フットサル運営スタッフ）、★嶋崎雅規（NPOサロン理事／国際武道大学）、★関秀忠（NPOサロン理事／弁護士）、★高藤順（吉備国際大学）、★茅野英一（NPOサロン監事／元大学教員）、★中塚義実（NPOサロン理事長／筑波大学附属高校）、野村忠明（埼玉ソーシャルフットボール協会運営委員／会社員）、守屋佐栄（スフィーダ世田谷サポーター／あるサカ愛好者）、★守屋俊秀（世田谷サッカー協会／東京都2級審判）、★柳井隆志（Sports for Social／筑波大学附属高校蹴球部OB）
【参加者（サロンファミリー以外）1名】
谷口弘（日本ラグビー協会技術部門レフェリーコーチング普及リーダー）
【報告書作成者】佐藤寛（国際武道大学サッカー部3年）

【コーディネーターより】
今年度、サロン2002では「スポーツと安全」を1つの柱に据え、月例サロン・公開シンポジウムを展開してまいりました。
今回は、「試合中におけるレフェリーの安全管理」というテーマで、サッカーとラグビーのレフェリーの安全管理について取り上げたいと思います。試合中に数多くのコンタクトが発生し、大きなけがの危険性もはらんでいるフットボール。その中で、レフェリーのゲーム・コントロールはプレーヤーの安全性に大きくかかわっています。
そこで、サッカーとラグビーのレフェリー育成に努めてこられたお二方から、
・レフェリーは試合中に、どのようにして安全管理に努めているのか。
・レフェリー育成の際には、どのような安全教育がなされているのか。
この2つの視点からお話を伺い、ご参加のみなさんとディスカッションしていきたいと考えています。

【キーワード】　レフェリー、安全管理、脳震盪、危険なプレー、VAR/TMO、レフェリーコーチ

【目次】

Ⅰ．サッカーにおける安全管理・教育
小幡 真一郎（元・サッカー国際審判員）
１．選手の安全を確保するために
２．危険なプレーを見極める
３．脳震盪について

Ⅱ．試合中におけるREFの安全管理
谷口　弘（日本ラグビー協会 技術部門　レフェリーコーチング普及リーダー）
１．自己紹介
２．ラグビーという競技について
３．マッチオフィシャルのパスウェイ
４．レフェリーコーチ（CMO）の役割
５．レフェリーの役割
６．コミュニケーションについて
７．ファールプレー

Ⅲ．ディスカッション

Ⅰ．サッカーにおける安全管理・教育

小幡 真一郎（元・サッカー国際審判員）

１．選手の安全を確保するために

まず、サッカーも多分ラグビーもそうですが、競技規則というものがあって、Laws of the Game という名前でありますが、その精神が一番大事で、レフェリーをするときでもこの精神に則り、やっていこうという風に指導もしていますし、自分もやっていました。

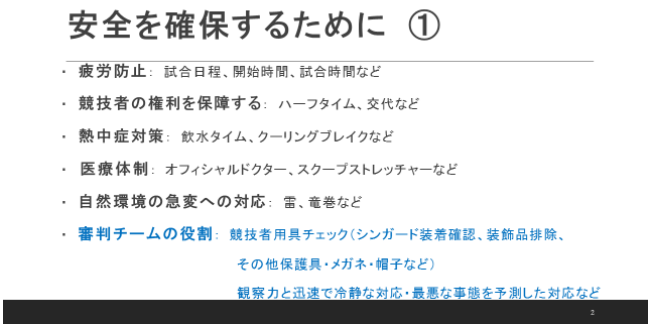
競技規則の精神について考える上で、まずは選手の安全や安心・快適さを保証すること。それがスポーツとしての公平とか公正に繋がる。その結果、やっている選手の技術を十分に発揮する楽しさ、やはりスポーツですから楽しくやらないと意味がない、11対11でやることの意味・楽しさがあると思います。誰かが抜けたり、怪我をしたりして引っ込んでしまうと、怪我した方も怪我させた方も楽しくない。最終的には楽しさにつなげていきたいと思っています。

安全を確保するためにということで今日はお話したいのですが、6つ考えてきました。

1つ目は疲労防止、例えば日程。今、高校選手権もそうなのですが1日おきにやっているんですね。或いは開始時間、夏は朝早い時間に試合を始める、あるいは夕方ナイターで始めるなど試合の開始時間。それ

から試合時間、インターハイは35分、70分ゲーム、実際は90分のところを70分でやったりすると、そういう疲労防止のための運営面での配慮です。

2つ目は選手の権利を保障すること。これは選手が当然取るべきハーフタイム、今Jリーグでは15分きちんとハーフタイムを取る。そして交代を5名あるいは3名と決めてやるなど、選手の権利をを保障することに繋がると思います。



3つ目として、夏は熱中症対策。今、気候変動で非常に大事になってきています。給水タイムあるいはクーリングブレイク。クーリングブレイクというのは更衣室あるいはベンチ、テントの中でしっかりと休んで体を冷やすということを行って熱中症を防ごうと。4つ目として、大会には医療体制が非常に大事でオフィシャルドクターを置いたり、スレッチャーもスクープストレッチャー要するに頭部を固定するような硬いものですよね、体を固定するようなストレッチャーを必ず用意しなければいけないという風になっています。

5つ目として、自然環境の急変への対応。夏は雷あるいは珍しいのですが竜巻などもやはり気をつけなければいけない。それらはインターネットあるいはアプリで、今、台風がどんな風に来ているのか、あるいは雨雲がどんな風に競技場に近づいているのか、そういうこともあらかじめデーターとしては掴んでおかなくてはならない。これはレフェリーも運営サイドと協議をしてやっています。

6つ目として、審判チームの役割としては試合前必ず選手の用具チェックをしています。脛当てを付けているかどうか、指輪やネックレスを付けていないかどうか、付けていれば外してくださいと言います。その他、例えばヘッドギアであるとかフェイスガードであるとか、あるいは眼鏡とか帽子そういう物をチェックします。小学生の場合は、よく爪を切っているかっていうのも見るときもありますね。もちろんスパイクの裏、金具が付けてあったり、或いは釘が出ているスパイクを履いている人はいないかと。我々の時代は自分で釘を打っていましたから。そういう意味ではスパイクの裏なんかも注意して見ますね。それから、ここは情報の収集という意味で観察力と迅速で冷静な対応をしなくてはいけないし、危機管理としては最悪な事態を予測した対応が求められていると思います。情報収集、危機管理というのはどの世界もそうなんでしょうけど、必ず安全を確保するには必要かと思っています。

２．危険なプレーを見極める

先ほどもちょっとお話しした通り、プレーの質をレフェリーが見ないといけない。乱暴な、著しく不正なプレーをさせないようにする。特に硬い部分の接触、肘や腕あるいは膝、足の甲、一番硬い足の裏などの接触は十分見極めないといけない、これは後でまた映像で見ていただきます。それから過剰なスピード、力ですね。これはアプローチ、ボールを競り合うところのアプローチを見なくてはいけない。サッカーは皆さんご存知のように身体接触が許されていますが、その相手に配慮をした、相手の安全を配慮したプレーであるかどうかというものも非常に大事です。反則としてはファールタックルあるいはファールチャージなどがあります。ここら辺をきちっとコントロールしないと試合が荒れてきます。それから身体部位への接触、一番気をつけないといけないのが頭、そして柔らかい腹、そして体を支えている背部などへ

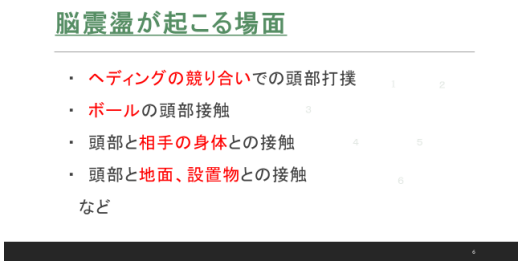
の必要以上な力をかけた接触がないかどうかも見ないといけない。一方で重篤な負傷に対する迅速な対応も心がけています。その他、後で出ますが脳振盪であるとか呼吸困難あるいは骨折、打撲、出血、心不全などが挙げられると思います。

ちょっと映像を見てもらいます。安全を損なうプレーです。これは足の裏で相手の足の甲を踏んでいる。これも足の裏あるいは足を高く上げて、これこそ過剰な力による足の裏で相手に接触している。これは非常に危険。これもそうですよね、ボールにはいっていますけどやはり相手の安全を配慮してない。こういうのはよくない。これは足ではない上半身、腕のところですよね、顔に手首から肘のあたりが強く接触している。こういうのは全て今退場だと言っています。途中一個だけあったのがVARというものが今ありまして、ビデオアシスタントレフェリーというシステムでイエローからレッドに変わったものもあります。

３．脳震盪について

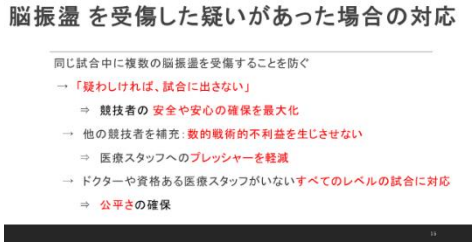
ここからは脳振盪について話をしていきたいと思います。IFABからの指示で脳振盪による交代が強く叫ばれています。頭部の神経に関わる負傷の可能性に関する試合中の対応策向上というのが目的です。

脳振盪が起こる場面というのは4つ挙げています。ヘディングの競り合い、後でまた映像を見ていただきます。ヘディングの競り合いでの頭部打撲あるいはボールが頭に当たるケース。それから頭が相手の体と接触するケース。それから頭が地面や設置物に接触するケース、例えばゴールポストであるとか看板であるとかなどが挙げられると思います。



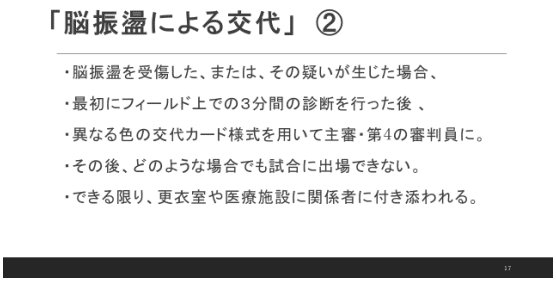
ちょっと映像を見ていただきます。まずは、ヘディングのケースです。これは青の選手のファールです。トリッピングですね。体によるトリッピング。このケースは頭から落ちて、レフェリーもすぐにトレーナーを呼んでいます。青の選手は相手を傷つけるような意図は無いんのですが、ここでこういう風に競らないと頭から落ちる、すごく衝撃の強い落ち方をする。こういう場合はすぐに立たせないで寝かせておいてトレーナーを呼ぶ。次は同じようなケースでゴールキーパーの場合です。これもボールをキャッチしようとしたところに白の選手が下に潜られて頭から落ちるケースですね。黄色の選手はファールをしようとしていないんですけど、競ってないとこういうことが起こる。これもすぐに競技を止めてトレーナーを入れると思います。次は相手との競り合い、これもサッカーでよくあるケースですね。お互いボールしか見てなくてボールにチャレンジしようとして相手と頭と頭が接触する。これはアドバンテージを適用ヒしましたけれど難しいところですね。ちょっと様子は見たんでしょうけれど、こういうケースはあんまりアドバンテージをしない方が良いかもしれません。次は味方同士ですね。これは今、ドロップボールで再開できようになったので、昔からもそうでしょうけどすぐに止めてしまいますね。以前よりはドロップボールを簡単に使えるので、怪我をした時にはどんどん使った方がいいと思います。これで赤がボールを持っているとまた難しいですよね。赤の選手のところにボールが転がっていくと止めるタイミングが非常に難しくなってきます。ペナルティーエリアの外で攻撃していないという状況で止めるのが良いかもしれません。5つ目はフリーキックの場面です。こういうケースはよくあると思います。壁の前に青の選手、味方の選手が跪いてボールのコースを隠そうとするんですけど、そこにボールが当たるケース。このようなケースは当然ボールを見てくださいねと言うのですが、後ろを見てやる選手がいるんですよね。これは危な

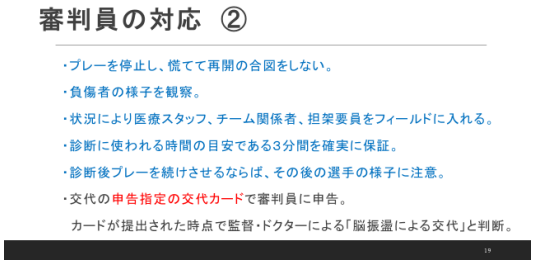
くてやめた方が良いと思うんですけど、なかなか選手がやめてくれないことがあります。ゴールの方に顔を向けて背中をキッカーに向けると、ひょっとしたらボールが今みたいに当たっちゃうとかなりの打撃があるんじゃないかと思いますね。レフェリーも注意はするのですが、なかなか守ってくれないことがありますね。今度は相手の肩が頭に当たるケースです。3番の選手が相手に打撃を与えるわけではないのですが、出会い頭というか、打ちどころが悪くて・・・。この次ですが、肩に頭が当たる。静止画を見ても貰えばわかるのですが、こういう形で3番の左肩が後ろの選手の顔面に当たっているというケース。これで脳振盪を起こしてしまうことがありますね。次、これはなかなかわからないですが、ちょっとよく見てください。赤の選手は続けるのですが、なんか様子が変なんですよね。レフェリーもきちっとわかってない。こういった場合は副審か第4の審判員がレフェリーに、このケースは多分コミュニケーションシステムを使っているので情報が伝わっていると思うのですが。もう一回見ていただけますか、競り合った時に白の選手の手が赤の選手の顔に、これ今のところで当たっているんですよね。これはなかなか、レフェリーは足の方を見ているとどこでどうなったのかわからないので怪我の状況が掴めてないこともありますね。以上が脳振盪の例です。



脳振盪があった場合の対応としては、同じ試合中に複数の脳振盪を受傷することを防ぐこと、2回3回とならないようにしなければいけない、疑わしければ試合に出さないことで、競技者の安全や安心の確保を最大化する。ただそうなると他の競技者を補充しなくてはいけないので、数的戦術的不利益を生じさせないために、特例を作っています。それは医療スタッフへのプレッシャーを軽減させることにも繋がります。もし、ドクターや資格がある医療スタッフがいない場合はレフェリーが判断します。全てのレベルの試合に対応して行います。それは公平さに繋がると考えています。

ただ、脳振盪による交代にレフェリーは関わりません。チームが判断するとしています。交代の回数が通常の回数とは別に扱われている。今Jリーグでは通常の交代プラス1回することができる。最大1名は上記対象外になるということが行われています。交代の数は皆さんご存知の通り3回とハーフタイムを除いて3回までというような対応をしているし、脳振盪とする場合はその例外と形として扱っています。脳振盪を受傷した、または、疑いが生じた場合は最初にフィールドの上での3分間の診断を行います。そこで判断していただいて、もし交代をするのであれば異なる色の交代カードを使って第4の審判員に渡します。その後、どのような場合でも試合に出場できない、もしくは復帰はできない。できる限り、更衣室や医療施設に関係者に付き添われて行くべきだとしています。





レフェリーはチームの判断プロセスには関わらない。脳振盪による交代を使用するに足り得るかどうか、判断しない。ただ適切な援助はします、サポートはします。トレーナーを呼んであげたりすることはあります。ここは審判員の教育に繋がるのですが、レフェリーとしてはプレーを停

止し、慌てて再開の合図をしない。選手がいくら大丈夫と言っても少し様子を見ることが大事です。状況により医療スタッフ、チーム関係者、担架要員をフィールドに入れる。診断に使われる時間の目安である3分間を確実に保証する。診断後プレーを続けさせるならば、その後選手の様子に注意を払う。そして、指定のカードで交代をさせる。カードが提出された時点で監督・ドクターによる脳振盪による交代と判断する。要するにプラスワンを心得、使われるということをレフェリーも承知しなくてはならないことになります。色つきの脳振盪用の交代カードという物を作っています。この映像は診断をするためにちょうど片足立ちで立てているかどうかというのをトレーナーが判断しています。こういうことを試合中、脳振盪があった場合、片足立ちで判断をしています。その後、スクープストレッチャーで頭を固定しています。こういう形でできるだけ頭を動かさないようにしながら外へ搬出しています。

ちょっと映像で見ていただきたいと思います。これは脳振盪を起こした選手3番に対してトレーナーが入ってきてダメ、できないという判断です。立っていられないので交代をしました。最後まとめになりますが、我々レフェリーと関係者あるいは選手も含めて、予防をする、怪我をしないような予防をすることが大事です。先ほども言いましたように用具あるいは周囲の物であるとか、そういう物も予防する。もし起こったら、そこで素早く危機管理をする。最悪の事態を想定して対応しましょう。それが選手の安全や安心に繋がります。さらに、スポーツの楽しさサッカーの楽しさを味わうことになります。体育の授業でもそうですけどスポーツ場面でやっぱり怪我をしてしまうと楽しくはできないと思います。色々な素晴らしい技術を発揮することも大事なのですが、安全に行って楽しさを皆さんと共有するということが求められていると思っています。以上で私のお話は終わります。ご静聴ありがとうございました。

Ⅱ．試合中におけるREFの安全管理

谷口　弘（日本ラグビー協会 技術部門　レフェリーコーチング普及リーダー）

１．自己紹介

皆さん、こんばんは日本ラグビー協会の谷口と申します。本日は、サロン2002の公開サロンにお招きいただき、ありがとうございます。なにぶんこういった経験が少なく、お聞き苦しい点も多々あると思いますが、ラグビーに関しても、興味を持っていただければありがたいと思います。本日はよろしくお願いいたします。

まず、最初に私の自己紹介ですが、私は1961年4月に埼玉県の秩父というところで生まれました。生まれた時は家に電気がなくて、3歳の時にやっと電気が通ったというそんな山の中で生まれ育ちました。ラグビーは高校入学時に出会って、そこから始めました。

レフェリーに関しては、始めたのが34歳と、かなり遅い時期になります。44歳の時に日本ラグビー協会の公認レフェリーに昇格させていただきましたが、すでに44歳と非常に年を取っていたので、3年ほどで引退しました。ちょっと早かったですね。

引退後は日本ラグビー協会のスタッフとして残り、レフェリーコーチに就任、2012年にIRB（現World Rugby）のEducatorという資格を取り、現在に至っています。もうすでに還暦を迎えましたので、公私ともにいいお爺さんということになります。

これが、match official Educatorの資格となります。IRBとなっていますが、World Rugbyは、以前IRBと言っていました。この資格を持って、若手レフェリーとレフェリーコーチの育成活動に携わっています。

プレーヤーとしては28歳で現役を引退します。先ほどサッカーの方でも小幡さんの方でもお話がありましたが、ラグビーも脳震盪が多いスポーツです。

私自身、現役時代に脳振盪を頻繁に経験したこともあり、残念ながら28歳で現役プレーヤーを引退しました。その後すぐにレフェリーの道を選んだかと言いますと・・・ちょっと違って、関心は全く違うスポーツに向かいました。

ラグビーを離れた空白の時代に何をやっていたかと言いますと、マラソンとかトライアスロン、また冬山や岩山（ロッククライミングの真似事）等、こういったものに挑戦していました。北アルプスで大切な仲間3人を雪崩で失ったという忘れられない経験もしています。

そして、最終的には陶芸ですね。いろいろなことをやってきましたが、やっぱり最後に気になるのはラグビーの世界といったことで、ラグビーの世界へ戻ってまいりました。

２．ラグビーという競技について

本セッションの目的ですが、コーチングの視点を入れながらレフェリーとCMO（レフェリーコーチ）の関係を理解していただきたいとおもいます。ラグビーをより理解していただき、より面白くなってもらったらいいかなと思っています。よろしくお願いします。

質問です。ここに、「ＰＲ□Ｄ２１」と書いてありますが、この□にはどんな文字が入るかちょっと考えて見てください。

答えは“N“です。「ニュートラル」ですね、車のギアになります。ニュートラル、これはレフェリーにとって非常に重要な言葉だと私は思っています。レフェリーの特権としてグランドでは最高の特等席で31番目のプレーヤーとしてゲームが楽しむことができると思っています。ラグビーは15人対15人のスポーツですが、時には心情的に（レフェリーが）16番目のプレーヤーになってしまうこともあります。

今、ラグビー競技規則が出ていますが、これはルールブックとは言いません。競技規則はLawです。ちょっと重いんですね、法律です。序文を紹介しますが、競技規則の中には「ラグビーは身体的接触を伴うということで、いかなるときも競技規則を遵守してプレーする」とあり、これが非常に重要だとされています。プレーヤーには技術的に競技規則を遵守してプレーできるよう安全な方法で楽しくプレーする。こういった責任があります。

ラグビーを指導するまたは教える人も同様で、競技規則に従って公正にプレーし、安全な行動をする準備ができるようにする責任があるということで書かれています。

競技規則の中で一番最初に出てくるのが「ラグビー憲章」（PLAYING CHARTER）です。これには5つあります。1つ目が「品位」（INTEGRITY）、2つ目が「情熱」（PASSION）、3つ目が「結束」（SOLIDARITY）、4つ目が「規律」（DISCIPLINE）、5つ目は一番大事な「尊重」（RESPECT）といった言葉で、ラグビー憲

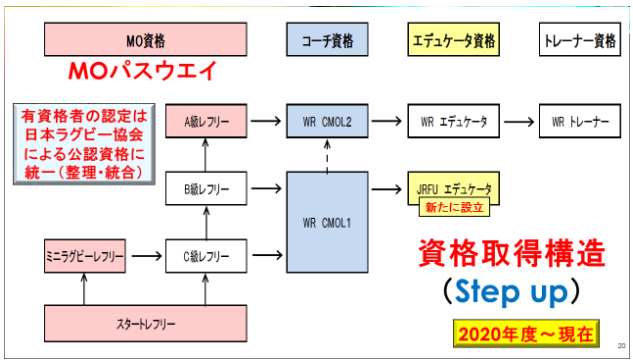
章の中で一番最初に訴えています。後ほど興味のある方は資料をお配りしますので、それを見ていただければと思います。

ここでまた問題です。この競技規則ですが、改訂が繰り返し実施されます。その周期とタイミングはいつでしょうか？という質問です。答えは「4年ごと」です。2019年にラグビーワールドカップが開催されましたが、ワールドカップが終わると大きな改訂が行われます。ラグビーが、よりスピーディーで面白く、安全な競技になるように改訂がされます。

4年ごとにルールが変わるのですが、一番大きな影響をあるものを紹介します。まずは安全性の面と競技規則の面ということです。従来ですと、紺のチームがボールを自陣からキックを蹴ってワンバウンドして敵陣の22mラインの中でタッチから出た場合、ボールの投入件は黄色のチームだったのですが、今回大きく変わって、バウンドしてボールがでた場合、今度は蹴った方の紺のチームのプレーで再開するとなりました。ここも面白くなったところです。こんな改訂が、いくつかされています。

３．マッチオフィシャルのパスウェイ

次はマッチオフィシャルのパスについて、2020年に確立したものを紹介します。日本サッカー協会さんを見習って、2年ほどワーキングを立ち上げ資格制度を確立しました。今までは、レフェリーの資格、コーチの資格等は都道府県協会または3地域と言われる関東、関西、九州という地域ごとに作られていました。正直いって統一されていなかったわけです。



従来は東京都公認とか埼玉県協会公認がC級レフェリー、関東協会、関西・九州協会公認がＢ級レフェリー、A級以上が日本協会公認となっていましたが、全ての資格を統一して、ステップアップできる仕組みに改革して、全ての資格を日本協会公認の資格に統合しました。これはコーチもエデュケーターも同じです。

４．レフェリーコーチ（CMO）の役割

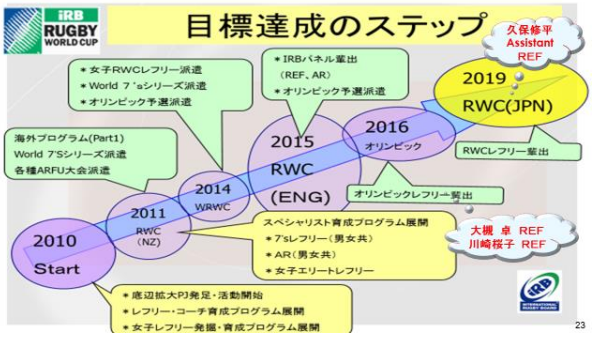
次に、CMO（レフェリーコーチ）の役割について説明します。コーチは、実はテクニカルな面だけではなく、メンタル面とか環境面とかあらゆる面でレフェリーをサポートしています。

Visionは、ワールドラグビーパネルレフェリーの輩出やレフェリーステータス向上にあり、魅力あるレフェリーの環境の創出です。正直言ってラグビーの世界は非常に劣悪です。私が現役の頃、秩父宮とか国

立で笛を吹いても、実は1試合3000円しかもらえない状況でした。今回リーグワンが始まり、だいぶ改善されてきました。日本サッカー協会さんに比べたら、まだまだ比較になりません。

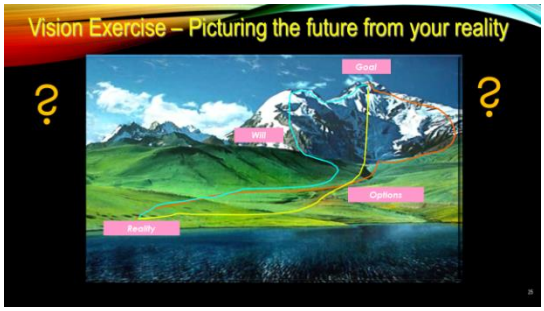
目標達成ステップは、2010年にスタートして2019年ラグビーワールドカップ日本開催に向け、ピッチにレフェリーを立たせようと10年がかりでレフェリーの強化に取り組んできました。

2016年リオのオリンピック（7人制）で男子の大槻レフェリー、女子の川崎レフェリーの2人をピッチに立たせることができました。2019年ラグビーワールドカップでは久保レフェリーをアシスタントレフェリーとしてピッチに立たせることができました。しかし、レフェリーには選ばれなかったという残念な結果から、まだまだ道は遠い・・・と思ったところです。

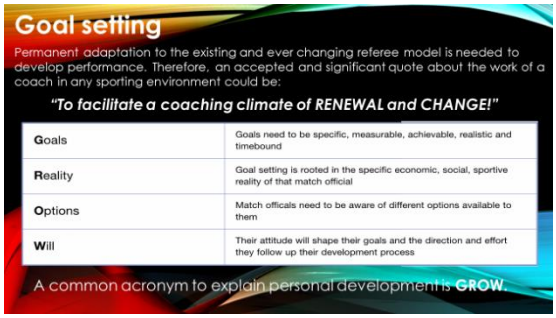


今、馬車の絵が出てきました。コーチのイメージとして、ラグビー協会ではこの絵を使っています。「馬車を牽引する＝レフェリーを牽引する」サポートするのがコーチといったところです。常にコーチはレフェリーに対して熱いエールを送っています。

コーチングをイメージした絵があります。山の頂上がGoalです。麓にRealityスタートがあります。ブルーの道、黄色の道、オレンジの道があります。Optionsがあるわけですね。直登する又は左の方に行く右の方に行く、人間ですからいろんな考えを持っている方がいて、そこに対して軌道修正していく。そうして目標に向かって向上させるこれがレフェリーコーチの役目となっています。



ここにゴールセッティングが書かれていますが、これも後で資料をお配りしますので、ゆっくり英語を読んで欲しいと思います。

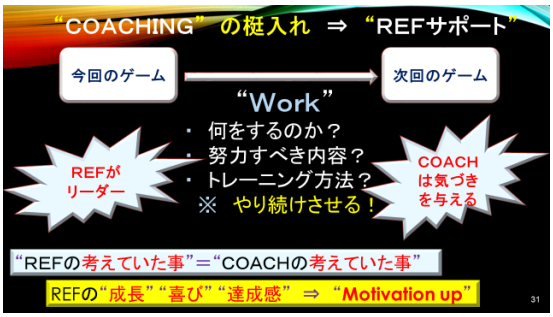


レベルに応じたコーチングということで、レフェリーの成長に合わせて指導する、納得させる、コンサルティング、レフェリーに任せるといったようにコーチの権限とレフェリーの権限が書かれています。成長度合いによってコーチングの仕方が変わってきます。コーチングが強いのがB級以下です。先ほどC級・B級とありましたが、B級以下はコーチングが強くなります。次にB級トップ、もうちょっとで日本協会の公認A級レフェリーなれるといった時にはアドバイザー的にコーチングと評価が半々の形です。トップになりますとREVIEWERということで、評価中心でコーチングの度合いは低くなる。ラグビーの世界では、このようなコーチングシステムを使っています。

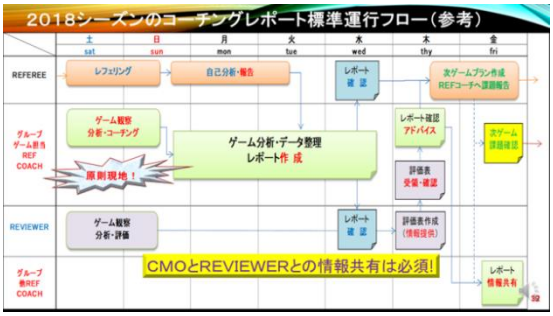
REVIEWERとCMO、評価者とコーチの違いですが、子供がレフェリーと仮定すると目的は同じですが、REVIEWERはレフェリーを評価する父親的存在、CMOはコーチングするということで母親的存在でアプローチの仕方が違います。時には同じ人間がREVIEWERになったりコーチになったりするのですが、帽子を被り直して手段を変えて対応します。最終的にレフェリーを育成させるといった目的に変わりはありません。

REVIEWERとCMOの違いは、こちらをご覧ください。REVIEWERは、成績をつけたりとか、資格を認定したりとか、1試合に限定とか結果論です。コーチは、指導をしたり、アドバイスしたり、過程を重視しています。コーチングはプロセス、未来を重視する。REVIEWERは、現在の結果を重視するというような形で使い分けています。

「コーチングの梃入れ」レフェリーのサポートをイメージ図にしたものがこちらです。今回のゲームを次のゲームに生かすためにWorkとしては何をするのか？努力すべき内容は何か？トレーニング方法は？、とにかくやり続けさせるようにコーチングしていきます。あくまでもレフェリーがリーダーであって、コーチは気付き与えるということです。レフェリーの考えていたこととコーチの考えていたこと、これが一致することが大事だと思っています。レフェリーの成長を喜び、達成感が我々コーチ陣のスタッフのモチベーションアップになっています。



現場でレフェリーングを観察してコーチングレポートを作成していく1週間の流れとなっています。次の試合までにしっかりと目標を定めてやっていくという流れでコーチとREVIEWERが情報を共有しながらやっています。



５．レフェリーの役割

次はレフェリーの役割ついて紹介いたします。レフェリーは自分の笛で始まる試合に最高のパフォーマンスをするように期待されていると認識しなければなりません。厳しくはあるべきなのですが、横柄になってはいけない。レフェリーは誠実さと品位を持ってプレーヤー、コーチ及び観客から尊敬される模範的な人物でなければならないと、レフェリーにはアドバイスしています。

また、ここで問題です。今年から、リーグワンが始まりました。コロナの関係で半分くらいが中止となっていますが、1試合あたり何人のレフェリー関係者・マッチオフィシャルが試合をサポートしているのでしょうか？

実はピッチにはReferee1名、Assistant Referee2名これは両サイドです。Pitch Controllerという選手の入れ替えを管理する人間がいます。それから、Television Match Officialということで1名。マッチオフィシャルとしてピッチに立っています。

実はゲームマッチオフィシャルが重大な反則を見逃した場合の補完策として、Citing Commissiner Liaisonという役割があります。私も携わっていますが、現地でマッチオフィシャルが見逃したレットカード相当以上の悪質な反則を映像でピックアップしてCiting Commissionerへ報告します。映像に基づきレットカード、レッドカード相当という判定に区分されます。

Citing Commissionerがレットカードと判断しますと、更にジュディシャルオフィサーに報告され追加制裁が課せられるという仕組みになっています。

リーグワンは、ワールドカップと同じようにチームに対して安全と規律守る牽制体制が確立されました。

JAPAN RUGBY LEAGUE ONEのジュディシャル・サイティングならびに日本ラグビー協会の不正なプレーに対する制裁に関する規程というのがあり、これに基づいて処分が決定されていきます。

ここで、映像を見て欲しいのですが、ちょうど点線（10mライン）のあたりでブルーの22番の選手が左肩で直接、頸部、頭にコンタクトしています。繰り返し映像が出ますから注目して見てください。22番のブルーの選手が赤の選手に頭部にヒット、ヘッドインパクトが強いプレーですね。こういった映像が、実はチームからも上がってきます。先ほど話しました現地でのサイティングの段階ではなくて、12時間以内にチームから申立書という形でCiting Commissionerの方に不正なプレーを見てほしいとあがってきています。これは現地でレフェリー、アシスタントレフェリー、テレビマッチオフィシャルが全部見逃したプレーとなっています。

もう一つが、その直後に起こったプレーです。青の4番の選手が今度は右肩で相手にハードコンタクトをしたプレーです。最初の映像の青22番の選手が4試合、あとの青の4番のプレーヤーが3週間の出場停止が後追いで追加制裁がされました。

良いレフェリーってどんなレフェリーでしょうか？悪いレフェリーってどんなレフェリーでしょうか？という質問です。イメージしてみてください。レフリングで一大切ことなのですが、ラグビーでは3つのキーワードがあります。レフリングの三大原則と言われています。安全と公平と一貫性です。ブレないレフリングですね。まず、何より優先されるのがこれ安全です。これはサッカーとも同じだと言えます。

レフェリーにおける安全管理ですが、まずはレフェリーの笛です。レフェリーはプレーの続行が危険と認めた時またはプレーヤーが重大な負傷を負った時は笛を吹かなければならないということが、先ほどの憲章に定められています。第6条では、レフェリーはいつでもプレーを止める権限を持っているとあります。プレーを続けさせるのが危険なとき、またはプレーヤーが重大な負傷を負った疑いがある時には、レフェリーは笛を吹いて試合を止めます。

試合前、先ほどサッカーの小幡さんからの説明ありましたようにラグビーも同じです。プレマッチミーティングというものがあり、試合前にマッチコミショナーを含めて、メディカルコミショナー、マッチドクター、チームドクターが集まってレフェリーと打合せをします。負傷選手の対応、出血選手の対応、救急病院の確認、ドーピング検査有無等について確認がされます。

レフェリーがプレーを停止して与えていい負傷対応のための時間は1分間です。1分間以上かかる場合は選手を外に運び出す。ただし、重傷事故の場合は安全が確認されるまでその場でそのまま停止することができます。

レフェリーは規則に従って、チームドクター、医務心得者、またはその助手が競技区域に入る許可を与えることができると定められています。

罰則についてですが、罰則のレベルは相手にどの程度の不利益与えたかの度合いによって決まります。罰則の段階ですが、ラグビーにはアドバンテージというものがあります。アドバンテージが適応される罰則、スクラム、ラインアウト、FK、PK、ペナルティートライ、イエローカード、レッドカードこんな順番になっています。これは反則の小から大への移行となっています。

不正なプレーは、第9条に、妨害（Obstruction）、不当なプレー（Unfair play）、反則の繰り返し、危険なプレー、不行跡といった形でラグビー選手に反するプレーヤーの行動を戒める形となっています。

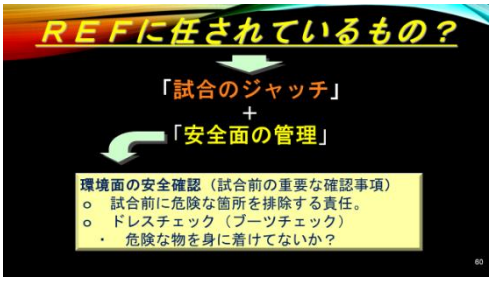
プレーヤーが出血した場合は一時的な交代が認められています。これは15分以内です。治療して血が止まればフィールドに戻ることができます。ただ、15分を過ぎると交代は正式なものになります。頭部の外傷ですけどもこれは先ほどもサッカー協会の小幡さんからも説明があったようにラグビー界でも同じようにHIAプロセスがあり12分間です。診察をしてドクターの診断を経てフィールドに戻ることができない場合は交代は正式なものになります。この辺りも細かく決められています。

ラグビーの場合は15人でプレーをしますが、実は8人の交代ができます。これはいつでもオッケーです。また、一回入替で退出したプレーヤーも、第3条に書かれていますが、負傷したフロントロプレーヤーに限り再びプレーすることができます。出血を伴う負傷をした場合とか頭部外傷を負った場合にも一回入替えたプレーヤーがもう一度プレーに戻ることができるといったことも定められています。

脳振盪の場合も映像チェックがあります。ヘッドコンタクトなどがあった場合に、すぐレフェリーが（プレーを）止めることが非常に重要す。また、トレーナーの方がすぐにピッチに入ってもらって治療等を確認することが定められています。実は1週間前、同じようなプレーがあったのですが、プレーが継続して5分間選手がグラウンドに倒れたままということがありました。同じレフェリーでやはり同じことを繰り返してはいけないということで、コーチングの中でも、しっかりとアシスタントレフェリー含めて重点的に見ていこうということを徹底したことで、その結果いい対応ができたという一例です。ほんとは前後の映像を見てもらえれば良いのですが、今回これだけにします。

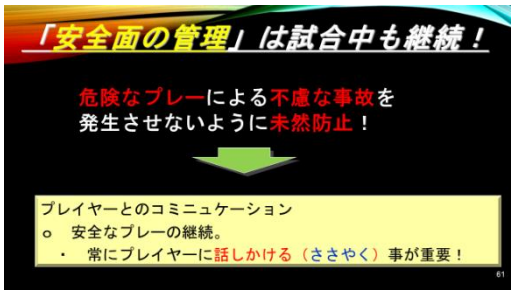
６．コミュニケーションについて

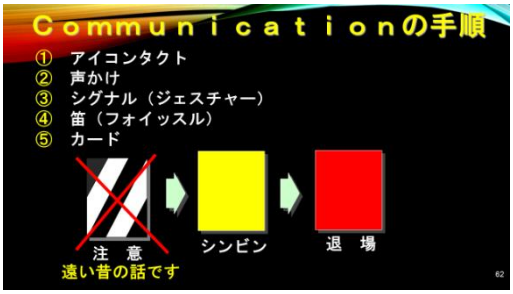
次にCommunicationについてお話しします。みなさん、ラグビーの試合を見ると、レフェリーが喋っていることが伝わってくると思いますが、レフェリーに任されているものは、その試合だけではなく、安全面の管理も任されています。試合前に危険な箇所を排除する、グラウンドもそうですし、ドレスチェックのときに危険なものを身につけてはないか、指輪とかしている選手もいますし、スパイクの裏がかなり危ない状態になっている選手もいますので、こういったものをしっかりチェックしていきます。安全面の管理は、試合中も当然継続されます。危険なプレーによる不慮の事故を発生させないように未然防止に努めています。プレーヤーとのコミュニケーションで安全なプレ



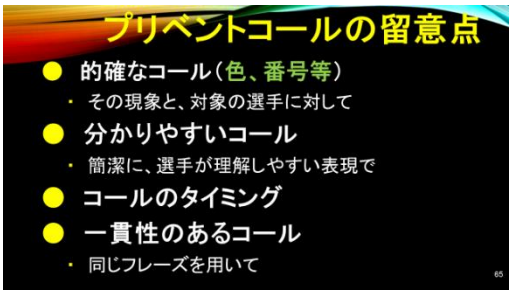
ーを継続させるためにも、常にプレーヤーに話かけるということで、常にレフェリーは喋っているといったところです。

コミュニケーションの手順ですが、アイコンタクト、声かけ、シグナル、笛、カードといったような形でなっています。今、カードが出てきましたけども一番左のゼブラカード・白黒になっているカード、昔私が現役の頃使ったカードです。黄色のカードがシンビンのイエローカード、赤色のカードが退場のレッドカード、この2枚を活用しています。



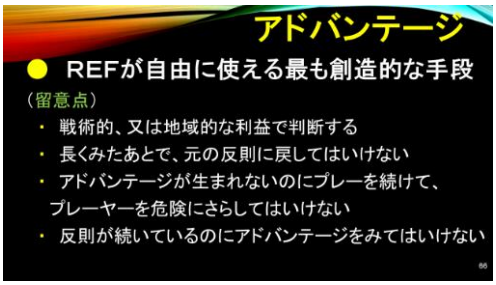


コミュニケーションですが、選手との会話には注意するようにしています。命令口調でなく、明確かつ簡潔にと、プリベントコールは1回毅然とした声で。プレーヤーは名前ではなくジャージのカラー、背番号で呼ぶように指導しています。また、笛は強弱、長短の適切な組み合わせ、シグナルは誰もがわかるように明確で簡潔なシグナルと競技規則に定められたシグナルをするように指導しています。プリベントコールですが、やはりプリベントコールは非常に大事です。プレーの継続という観点からも、反則があったら全て笛を吹いていたのでは、ラグビーが試合になりません。



大切なのはプリベントコールと、レフェリーングの基準の明示です。良いプレーと反則の線引きをしっかりする。的確なコールという面では、色（ジャージカラー）、背番号、わかりやすいコールのタイミング、一貫性のあるコールということでやっています。

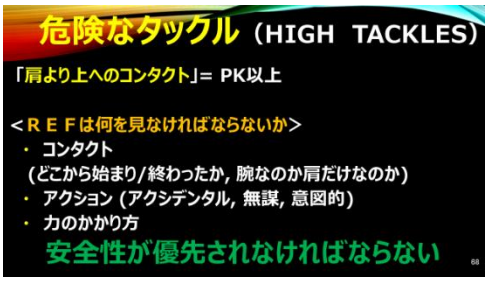
アドバンテージ、これはレフェリーが自由に使える最も創造的な手段ですが、アドバンテージの良し悪しで、トップレフェリーになれるか？なれないか？の境目といっても過言ではありません。



7．ファールプレー

ファールプレーです。これから映像を見ていきます。

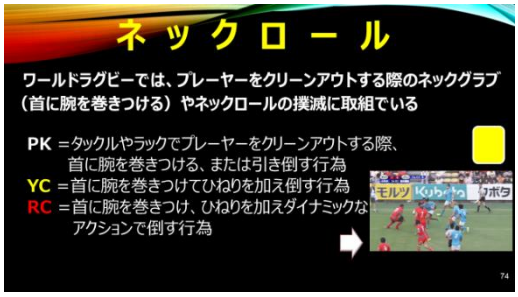
まず、最初に危険なタックルですが、肩より上へコンタクトは、PK以上です。レフェリー何を見なければいけないのかと言いますと、コンタクトがどこに始まりどこに終わったのか？腕なのか？肩だけなのか？それとアクションです。アクシデンタルトなのか？無謀なのか？意図的なのか？さらにパワーバランスです。力のかかり方、こんなところを注視しています。



安全が最優先！これは言うまででもありません。

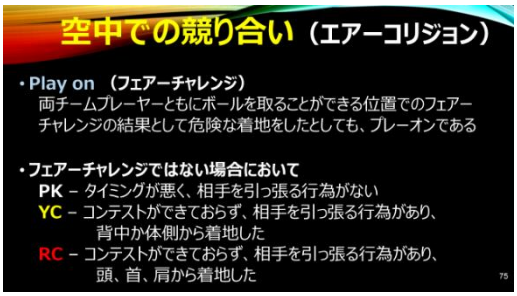
この映像では黒の3番がタックルしましたが、ハイタックルで、これはペナルティーだけです。次は黒の1番です。右上から来る黒1番です。ジャンプして首に巻きついています。これはイエローカードになります。次は黒の22番です。これもイエローカードになります。次もハイタックルですが、次はレッドカー

ドです。黒の13番、レスリンググラブと言ってヘッドコンタクトが非常に厳しいです。これはちょっと分かりづらいかも知れないですが、白の10番が、パスを放ったあとの青の10番に対してタックル。ここですね、これもレッドカードになります。直接頭頸部へのインパクト。



次はネックロールというプレーをちょっと見てください。赤の13番が、青の15番に対して首を巻いて後ろに倒す。

次はエアーコリジョン、空中での競り合いについてです。このプレーは、ボールに対して競りに行ったのですが、たまたま黒のプレーヤーが赤のプレーヤーよりも下に行ったのです。これはペナルティーになります。これも先ほどのプレーと同様です。黄色のプレーヤーが、赤のプレーヤーの下に入ってしまいました。こういったプレーでは、背中から落ちた場合はイエローカード、頭から落ちた場合にはレッドカードになります。



今度はヘッドインパクト、頭への衝撃です。青の8番が、赤の4番に対してタックル。頭への強い衝撃があります。

次は、トライかどうかです。得点に関わるもので、ボールがキックされてインゴールに転がっています。右下に黒いシャツを着た人がいますが、TMOです。

色々とお話ししましたけれど、やっぱり大切なのがレフェリーとしてもマッチオフィシャルとしてもチーム力だと思います。あと、伝える力、感じる力、理解する力、これがコミュニケーション能力であり、チーム力であるかなということ。我々ラグビー界では、マッチオフィシャルとしてこんな形で動いています。

better game better coaches better officials とありますけど、色々映像を見てもらいましたが、私とか嶋崎さんが現役でやっていた頃は、レフェリーが全部判断していました。アシスタントレフェリー制もありませんでしたし、全てレフェリーの責任でやっていました。

ラグビーはだいぶ進化してきましたので、とても1人じゃ見きれないということで、アシスタントレフェリーとか、TMOとか、サイティングいったものが確立されて、安全を重視して、ラグビーより面白いゲームになるような仕組みが作られました。

2019年ラグビーワールドカップでは、日本代表、ジャパンの快進撃は皆さんの記憶にあると思います。なんといっても南アフリカ、サモアに勝利した2015年の大会から、だいぶ価値観が変わりました。やは

り、三位一体でやっていくことが大事だと。その中でも、やはり日本代表が強くなるためには、レフェリーのステータスが上がっていかないと、レフェリーの基準が高まらないと日本代表は強くならない。レフェリーが国内でいい笛を吹かないと、海外に出て行っても絶対勝てません。最後になりますが、我々コーチ部門は、ベターラグビーを創造するために、レフェリーを育成することにフォーカスして、レフェリーの活動支援を行っています。是非ラグビーに対して興味を持っていただけたらありがたいです。

嶋崎：ありがとうございました。まずは、今の谷口さんのご発表に対しての何か質問のある方いらっしゃいましたらご発言ください。守屋さんどうぞ。

守屋：谷口さんのお話の中でコーチという言葉が出てきたのですが、プレーヤーに対するコーチなのか、レフェリーに対するコーチなのか、あるいは両方を指しているのか、最後の画面のところでプレーヤーコーチと言葉が出てきたので、若干混同しそうだったのですが。

谷口：はい、ありがとうございます。私が説明したのは、レフェリーのコーチです？レフェリーを育てるコーチとプレーヤーを育てるコーチも一緒になって日本代表を強くしていきましょうといった意味合いです。

守屋：ですからコーチというものは二面性があるわけなんですね。

谷口：そうですね、マッチオフィシャルのコーチです。

Ⅲ．ディスカッション

嶋崎：はい、ありがとうございます。他にいかがでしょうか。よろしいですか。
　そうしましたら、お二方のお話しを通して聞かれまして、何かご質問とかご意見ある方、ご発言いただけましたらと思います。いかがでしょうか。今日の映像は、どちらも危険なプレー、特に首から上の脳震盪につながるような危険なプレーの映像というのがたくさんあったと思うのですが、現実の中ではたくさん起こっていますのでこれをどうやって防いでいくのか、レフェリーの立場でそんなことを日々考えられてレフェリー養成にあたってらっしゃるんじゃないかと思います。中塚さんお願いします。

中塚：どうもありがとうございました。サッカーもラグビーも同じところから始まり、同じマインドを持つスポーツだと理解していますし、学校でもそのように伝えておりますが、テクロノジーの影響が大きいことを改めて感じました。プレーヤーだけでやってたスポーツにレフェリーが入り、もめごとはレフェリーに委ねるようになる。けどレフェリーだけだと見えないところ出てくるので、アシスタントレフェリーはもちろんですが、そこにテレビマッチオフィシャルやビデオアシスタントレフェリー呼ばれる人が入ってきた。テクノロジーがフットボールに導入されていく大きな流れが感じられるし

実際そうなんだろうなと思います。にも関わらず、やはり最終的な決定権はレフェリーに持っていて欲しいと私は思います。まずサッカーの場合、最終的な判断はレフェリーですよね。ではラグビーの場合は誰が決定権を持つのでしょうか。例えばテレビマッチオフィシャルを利用した場合の1つ1つの判断に関して。その辺りの現状と今後の方向性に関する小幡さん、谷口さんのご意見をお聞きしたいのですが。

谷口：ラグビーも決定権は全てレフェリーです。あくまでもアシスタントレフェリーとかテレビマッチオフィシャルはサポート的な存在で、最終判断は現地ではレフェリーです。ただ先ほどちょっと紹介しましたが、現地ではレフェリーやアシスタントレフェリー、TMOなどが見逃した反則に関して、サイティングといった形で上がってきます。そこはサイティングコミッショナーが、レッドカードなのかレッドカード相当なのか判断してジュディシャルといったところに上げて、ピッチ外のことはジュディシャルが最終的には判断する形になっています。こんな説明でよろしいですか。私も思うのですが、中塚さんがおっしゃる通りやっぱりアシスタントレフェリーというものに頼るのではなくて、レフェリーが最後まで責任持ってやってもらう方が人間臭いし、泥臭いし、ラグビーらしいかなというところが私も心の中では思っています。以上です。

小幡：中塚さんの質問は非常に悩ましいところです。なぜ悩ましいかというと、サッカーの場合はあとでカードを差し替えることはないんです。試合の中で決まったことは、たとえどんなことがあってもそこでおしまい、映像見てそれを覆すことはないです。だから余分に黄色が出たり赤が出たりすることはないです。もちろん取り消すこともないです、今のところは。ビデオアシスタントレフェリー制度、VARについては、まだ過渡期ですので、今は重大な違反、重大な間違い、大きな間違いだけを、PKあるいは退場あるいは人間違えをして、その4つがあるのですが、それに限っていますが、だんだんそうではなくなってきそうです。ひょっとしたら、今でもそうですけど得点、得点に関わる前のファールを映像で見直してそこがファールであればもちもんオフサイドであれば得点は取り消します。どこまで遡っていくかということです。例えばスローインが間違ったと、それが間違った結果得点になってしまった。そこは戻さないんですよね今は。でもゆくゆくそうなる可能性もあります。そうなるとサッカーではなくなってきてレフェリーっていらんやんもう全部AIがアシスタントやってレフェリーは画面見ててファールかファールでないか判定したり、そんな風になってきそうです。それではやっぱりスポーツの楽しさを僕は味わえなくなるんじゃないかなという気がしています。正しいことがいいことなんか、正義が素晴らしいことなんかというところに行き着くんじゃないかなと。やっぱり人間がやってて、中で当然見えないこともあるし、そういうふうに判断できないこともあるのに、それを全部機械がやってあるいは映像で判断していくのはいいことなのかどうか。今はVARでレフェリーが守られるようになりました。もし間違っても、VARに言ったら直してくれるんですよね。だからPKを簡単に吹きます。今は違ったら違うという形で直されちゃうんですよね。それはレフェリーが守られることにもなるし、レフェリーが責任を持たないことにも繋がっていくので、個人的にはVARが進んでいくことについてはきっちっと見極めていかなければならないなというふうには考えます。そういう答えでよろしいでしょうか。

中塚：ありがとうございます。私も小幡さんがおっしゃったような危機感を一方で感じていまして、「ミスジャッジもゲームのうち」という感じでフットボールはプレーされてきたし、ラグビーもそうだと思いますけど、プレーしている人たちにとってはレフェリーの言ってることが全てだから、笛が鳴るまでとにかく続けようという約束事でやってきたはずです。中にはもしかすると間違いもあるのかも知れないし、だいぶ後になっても語り継がれること、例えば伝説の66年イングランド大会の決勝ゴールが入っていたかどうかとか、語り草として伝えられるところに人間がやるスポーツの面白さあるんだろうと思うんです。この面白さがわかってくれない人が増えてきているんじゃないかという気がして、すごく心配しています。その一方で危ないプレー、見えなかったところがテクロノジーのおかげで見えるようになってきてプレーヤーが守られるようになったことはあるかもしれません。ラグビーはサッカーより先行していろんなことに取り組まれていると思い、すごく参考になります。

嶋崎：ありがとうございます。谷口さん、TMOが使われるのは得点に関わる場面と、カードに関わる場面というような理解でいいんでしょうか。

谷口：おっしゃる通りです。ただ、最近はコミュニケーションというような話がありましたけどもさっきの映像でも「チェックチェック」という言葉がありましたが、その言葉が入ると暗黙の了解で、レフェリーが見えなくてもTMOが見えたらアドバイスを送っています。だいぶ変わってきました。

嶋崎：レフェリーの方からリクエストしてTMOに確認するのは得点に関係する場面と、それから今の危険なプレー、レッド・イエローに相当する場面ということですよね。でも、現実的にはTMOの方から「チェック」という声が入ることがあるということですね。

谷口：そこはみんな、ピッチの中で仲良くやっていますね。

嶋崎：はい、わかりました。やはり危険なプレーから選手が守られるということあるいは危険なプレーを抑止するという意味では映像を使うということは非常にいいことなのかなと思います。

谷口：反則も、サイティング制度とか色々、牽制する仕組みができてきているんです。悪質なプレーは減ってきました。これは、すごく効果が出てきているかなと私個人的には思っています。

嶋崎：昔は、よくレフェリーを試して来る奴はいました。「今日のレフェリー取るからやめとけよ」と言う選手がいました。それがなくなるということですね。ありがとうございます、他いかがでしょうか。

守屋：今、映像の話が出てきていたのですが、映像が使われるゲームというのはごく一握りのトップチームの話だけであって、圧倒的に多いグラスルーツあるいは高校だと映像は助けてくれないので、そういうシーンでどういう風に映像の代わりになるものを、どうレフェリーが頑張っているのかというところも一つ興味があるっていうか教えていただきたいと思います。

嶋崎：そうですね、競技場ではないような場所で行われるゲームをたくさんあると思いますので、その場合ということですね。これは、小幡さんいかがでしょうか。

小幡：そうですね。やはり限界はあるんですね。グラスルーツの試合を全て正しくやれるかどうかっていうことを考えると4人で組んでいるので、4人の力で8つの目でそういうことをジャッジするということしか今はできないんですよね。特に、子どもの試合などは力の差は結構あるんですよね。同じ小学校4年生でも体の作り、成長、発達している子とまだおぼつかない子と。そういう子が競り合う場面は非常に気をつけなければいけないとは思っています。今回は高校選手権でも明らかにそうでしたけど、トップチームと地域チームではサッカーの質が全然違うというのも、そこはサッカーの特質を考えながらレフリングしないといけないんだろうなと私個人的には思っています。

嶋崎：はい、ありがとうございます。谷口さん同じ質問どうでしょうか。

谷口：先ほど説明したハイスタンダードはトップのゲームだけであって、やっぱり河川敷の試合とか色々あるわけですが、そこはほんとレフェリーに委ねられています。そこの試合にコーチがいれば、試合が終わったあとチームのプレーヤーコーチと話し合ったりすることはあるのですが、それがほとんどない状況ですね。そこは改善すべきところなのか知れません。そこに本来のラグビーの原点があるかなという私は気がします。やっぱり若いレフェリーとかそういったカテゴリーの低いゲーム担当するレフェリーは、先ほどラグビー憲章がありましたけれど、5つありましたね、その中でやっぱりリスペクトということをしっかりとチームに確認した上で試合を進めていってほしいなってことはアドバイスしています。全部のゲームにTMOが入ってきてチェックできれば、本当はいいんのでしょうが、そうすると先ほど中塚先生がおっしゃっていましたけど、本来のサッカーとかラグビーのレフェリーに委ねて、選手たちやチームが試合をマネージメントというか作っていく、そういったものが失われてちょっと魅力のないものになっちゃうのかなという気はしないでもありません。

嶋崎：ありがとうございました。ラグビーについてはですね、例えば大学でもリーグ戦3部以下ぐらいとか高校大会とかだと3回戦場合によっては準々決勝ぐらいまではですねアシスタントレフェリーもつかないです。1人です。いわゆるタッチジャッチというボールが外へ出たか出てないか、これだけを判定するのを学生がやるわけです。レフェリーの資格を持っていない学生が。一応大学の場ではタッチジャッチ講習会を開催して講習は受けさせるのですが、実際には完全に1人の状態でやらなければいけないということになっております。自分の場合は高校生を吹くことが多かったのですが、1回戦から吹きますから、試合前にどれだけチームとコミュニケーション取れるかだと思うんです。僕はこういう基準でこういうところは厳しく吹くよということをしっかりと守らせるように言っていく、それから試合中も声をかけてコミュニケーションしながらやっていく、そういう信頼感を持ちながらやっていくことしか危険なプレーを予防することはできないのかな。あとは危険なプレーに対して躊躇なく笛を吹く。アドバンテージ一切なしでピっと吹いて、カードであればカード、注意するのであれば呼んで注意するということをしっかりして、自分の姿勢を示す曖昧にしないということが唯一でき

ることかなと思ってやっていました。はい、以上、私からもちょっと一言コメントさせていただきました。あといかがでしょうか、安藤さんお願いします。

安藤：途中から顔を出しましたけれど、移動中だったので失礼しました。お二人のお話、とても興味深く聞かせていただきました。今、ちょっと話題になっていた点で小幡さんに質問させてもらいたかったのですが、脳震盪絡みなんですけども、審判は交代とかの判断とかはできないとかいうお話ありましたよね。あれはレベルに関わらずということでよろしいんですか、つまり小学生だろうが中学生だろうが判断はチームに委ねるということですか？

小幡：最後に書いてあったと思いますが、要するにドクターがつかないあるいはトレーナーがいない学校ってありますよね、それはレフェリーが関わります。

安藤：すみません、聞き逃してました。

小幡：そこはレフェリーが対応しないと誰も対応してくれないので、例えば選手に対して声かけしたり、あるいは片足立ちをさせるかどうかわからないですが、そういった対応はします。

安藤：なるほど、わかりました、ありがとうございます。

嶋崎：はい、ありがとうございます。そうですねドクターがいるゲームはいいんですよね。高校生の大会も基本的にはドクターには来ていただくようには一回戦からしていますが、ドクターがいないというケースもありますので、そういうケースが非常に難しいです。それともう一つはラグビーの場合にはU-19場合だと脳震盪と判定されると3週間は試合に出場できないんです。そこで頭部打撲をした選手が中心プレーヤーだったりすると、ベンチから非常にプレッシャーがかかるんですよね、「脳震盪じゃない」と言って。脳震盪と判定されると3週間出場できなくなるので。今年の高校選手権では、國學院栃木のキャプテンは一回戦で脳震盪起こして、決勝戦まで全く出ていません。そういうこともあって、非常にレフェリーがプレッシャーかけられたりすることもあります。はい、あと谷口さんのいかがですかね。今の問題については。

谷口：おっしゃる通りですね。基本的には小幡さんのおっしゃったような形で、カテゴリーによって全然環境違いますからね。最初にやっぱり今、嶋崎さんがおっしゃたような高校の大会の1回戦2回戦とか一番危険なのはクラブですよね。クラブ試合で、勝手に自分たちで試合をやっているようなところはもう全てレフェリーが判断しなくちゃいけませんので、そこはやっぱり毅然と対応するしかないのかなといったところです。私も昔、脳震盪で高校の時に何度か倒れて、あと社会人になってクラブでやっている時にも脳震盪で救急車に運ばれたということがあるんです。昔は、トレーナー制度とかメディカル制度はほとんどなくて、頭に水をかけられて、「グランドに行け」という形で送り出されていました。試合が終わったら、自分は何をやってたんだろうと全然記憶がないような状況が続いて非常

に危険な思いをしたことがあります。今はそういった面でもHIA制度とかが非常に充実してきましたんで、たいぶ安全面については確立されてきたんじゃないかなと思っています。以上です。

嶋崎：はい、ありがとうございます。自分も高校時代に脳震盪起こして、また試合に出ているんですよね。自分は試合のこと1つも覚えてないんですが、ビデオが残っているんです。ビデオを見たら、自分は一回退場するのですが、もう一回普通にプレーしているんですよね。でも全く覚えてないです。翌朝目が覚めた時に「あ！試合行かなきゃ」と思ったんですよ。そしたら昨日怪我して帰ってきたんだよって母親に言われて「えっ！」と言う、もうそれぐらい24時間記憶がなかったという、恐ろしいことがあります。それは怖いことなので、絶対にしてはいけないことだと思います。

谷口：「魔法のやかん」という言葉が入っていましたけれど、魔力ですね。

嶋崎：いかがでしょうか、ほかにございますでしょうか。脳震盪と言ったらやっぱり関さんが何かあるのではないでしょうか。

関：弁護士の関と申します。今日は本当にありがとうございました。谷口様にお伺いさせていただきたいと思います。私はラグビーについて詳しくないのですが、ワールドカップ日本大会が行われた時に、その前に、ハイタックルとかショルダーチャージなどの反則の判断基準が明文化され、その後に「こういうことをしたらファウルになるよ」という事前のアナウンスがされていると思います。そこで、①危険な反則の判断基準がどのようなプロセスで決まるものなのかということと、加えてその判断基準の裏付けになるような危険な事象をラグビー界で収集されているのかという点を1つお伺いしたいと思います。あと②ルール内容の改正に関するアナウンスされるのみならず、ルールが変わったことから、「レッドカードになるような反則を防ぐために、プレーをこのように改善していかなくてはならない」というアナウンスはされているのでしょうか。未然防止の観点からお伺いさせてください。

谷口：はい、ありがとうございます。非常に興味を持って聞いていただいて嬉しく思います。最初反則の基準ですが、毎年シーズンが終わった後トップレフェリーが集まってそのシーズンの反省をします。先ほどワールドカップが終わった後、ルール改正があるというお話をさせてもらったんですが、それも含めて、いかに安全で楽しいラグビーにするかということでトップレフェリーとトップコーチが集まってガイドラインというものを作っています。翌シーズンに向けて、基準を明確にすることで。そこにはハイタックルだったら胸から上にタックルしたらそれは全てダメだということと事象ですね、どんなプレーをしていたらレッドでどんな形だったらイエローで、ペナルティーはどのような形なのかということを全部カテゴリーに分けて映像で示します。その映像を、日本協会から各地域協会、関東協会、私は東京所属ですが、東京都協会を通して東京都のレフェリーまたはチームに、映像と資料を持ってアナウンスするような仕組みになっています。後は収集ですが、シーズン中にいろいろな事象が出ます。先ほどサイティングの事象を紹介しましたけれども、ああいった事象を全部ピックアップして貯めて、メディカル・トレーナー部門の方と相談しながらデーターの収集を行っています。そういったものを集めた中でガイドラインを作って、安全なラグビーの構築にあたっているといったと

ころです。後はレッドカードを防ぐといったところは、チームの練習にトップレフェリーが行って、ガイドラインを含めて講習、こういったプレーは非常に危険だからやめてほしいというアナウンスをしまして、トップレフェリーと大学、社会人のトップチームのコーチが集まって基準の明確化、目合わせみたいなことも毎シーズンやっています。今、リーグワンが始まっていますけれど、おそらく中間で一回また集まって、傾向とかこういったプレーはやめましょうとそんな話し合いもあります。チームともにコミュニケーションを取って反則の撲滅をする、安全なプレーに対する注意喚起ということを行っていることは紹介させてもらいたいと思います。こんな回答でよろしいでしょうか。

関：はい、大変参考になりました。ありがとうございます。

嶋崎：ありがとうございました。今谷口さんがおっしゃられたようなことは、例えば東京都の高校大会の前にも東京都のレフェリーで高校大会を吹くレフェリーとコーチとが集まって、映像見ながらミーティングして基準を明確化して大会に入ることはやっていました、今はどうかはわからないんですが、私がいる時にはやっていましたので、そうやって選手とコーチサイドとレフェリーサイドで基準をしっかり擦り合わせてくうことが、反則の防止に繋がるのではないかというふうに思ったりもしています。はい、すいません補足でした。他にいかがでしょうか。

中塚：今の質問の続きですが、国内での大会に向けて、あるいは大会の総括のような形でやっておられるのはわかるんですが、ラグビーというスポーツがどのような方向に向かっていくのかなど、より大きなビジョンについてはどうなのでしょう。2019年のワールドカップの時には、危険なプレーに関する対処が、2015年よりもしっかりしていたなと、上から目線で変な言い方ですが、素人目に感じました。それが世界中に浸透し~~て~~、プレーヤーもしっかり守って、だから逆に危ないプレーがすごく目立っていたと思うのですが、そういうことをワールドラグビーが方向づけているのでしょうか。サッカーの場合、ルールについては先ほども小幡さんが言われたIFAB・International Football Aassociation Boardで議論して世界に浸透していくわけですが、ラグビーの場合はワールドラグビーでやっているんでしょうか。

谷口：はい、今中塚さんがおっしゃっていたようにワールドラグビーで全て決められて基準も映像も全部作られてくるのです。それを日本で解釈して、ブレイクダウンをしてガイドラインとして落とし込んでいるといった状況です。特に今シーズンはハイタックル、ヘッドインパクトに非常にフォーカスしていこうというような形となっていますので、昨シーズンからのハイタックルの基準とかヘッドインパクトところは非常に厳しい判断をしています。よって安全なラグビーが、そこで浸透してきたかなというふうには感じています。

中塚：それは世界的な傾向ということですね。

谷口：そうですね、おっしゃる通りです。ワールドラグビーが全てです。

嶋崎：日本はその話し合いに参加できていないということですね。その話し合いにそのものには参加できていなということにはなりますか。

谷口：いやいや、参加はしています。ラグビー関係で原田君というマネージャーがいるんですけれど、彼が、今委員になっていて、そこには参加しています。

嶋崎：原田さんですね、関西の。

谷口：そうです。今、日本ラグビー協会の審判部門のマネージャーをやっています。ラグビーのステータスも、ワールドラグビーからラグビーワールドカップ日本開催といったことで認められてきたといったステータスかもしれません。

嶋崎：ありがとうございます。そういうIRBの時代には中々日本は呼ばれることはなかったかもしれないのですが、今、段々と日本のレベルが上がってきたことも認められているということです。

中塚：小幡さん、この辺り、サッカー界はちょっと事情が違いますよね。

小幡：先ほどの話だけでいうとシーズン前にスタンダードを作って各チームに回って当然練習試合なんかもしながらチーム、監督さん、スタッフも含めて説明会を前はやっていました、今はどうやっているかは、ちょっとコロナの関係でどんな形態でやっているか分からないです。中塚さんがおっしゃっているようにFIFAからはきてないですね。今、我々はイングランドと提携をしているので、プレミアリーグの指導者がサッカーのトレンドを伝えてくれて、それを使って説明をしているのが現状ですかね。中塚先生そういうことですか。ご質問のところは。

中塚：いや、IFABの構成員のところですけど。

小幡：IFABは、今参加はしていないですが、聞きに行っていると思います。小川佳実さんが、そこには行っているとおもいます。もちろん田嶋会長もそこには参加していると思います。ただ一番いいのはそこで議論をしたいのですが、今、上川さんがFIFAのインストラクターを降りてしまったので、ちょっと誰がFIFAに入っているのかは知らないんですけれど。むしろ女性の深野さんと山岸さんはFIFAのインストラクターなんですけどもね、男子は今入ってないんですかね。

中塚：IFABのメンバーは英国4協会とFIFAが4票ですよね、決定権持っているのは。

小幡：おっしゃる通りです。

嶋崎：守屋さんいかがですか。

守屋：つい3日ほど前に2級の更新研修で映像を見たのですが、この前のオリンピックの時に世界中からレフェリー男女ともに集まって幕張で缶詰になって研修をしていた、その映像で流経の選手たちに練習試合をさせたんですね、審判たちが笛を吹いたりしていたのですが面白かったのが流経の選手たちに仕込みあってこういう場所でこういうファールをしてくれっていう仕込みがあったらしいです、でそれを見逃さずに取れるかどうかという話題ですが。

嶋崎：ありがとうございます。中々面白いことを。でも試されるレフェリーにとってはちょっとたまらないなって気がしましたけれど。

守屋：ペナのライン上くらいで、中でやったのか外でやったのかっていうところを見極めたりするところとか、中々面白かったです映像として。

嶋崎：はい、情報提供ありがとうございました。はい、お時間もそろそろとなりましたので最後お一方くらい大丈夫でしょうか。よろしいですか。はい、そうしましたら、本日は小幡さん谷口さん本当に貴重なお話をありがとうございました。最後に、その前にあれですね。遅れて入られた方に自己紹介を関まだお話されてなかったですよね。

関：あのサロン2002の理事を務めております弁護士の席と申します。理事長の中塚ヨシミ先生の筑波大学附属高校のサッカー部の教え子だということになります。頭が上がりません、よろしくお願い申し上げます。

嶋崎：はい、北原さん一言お願いします。

北原：楽しいお話ありがとうございました。この間選手権の決勝で、私はマッチオブザオフィサーというよく訳の分からない安心安全を守る人をやったのですが、今ラグビーの話聞いていると、うまくそういうのをみんなで学びながらサッカーをやっていきたいなと思いました。どうもありがとうございました。

嶋崎：ありがとうございました。皆さんに一言ずついただいたかと思いますので、それでは最後に小幡さんの方から一言お願いをいたします。

小幡：はい、今日はありがとうございました。いろいろな意見を伺って、また私もラグビーをそんなに知っている訳じゃなかったので非常に勉強になって、今日は私も触れなかったのですが、コーチ制度については非常に興味があって、今後レフェリーをどうサポートするとていうのが我々の課題でもあるので、まぁVARが出てきてあるいは難しい判定が出てきて、さっきの中か外かという判断をするにしてもストレスもかかるだろうし、そういう意味でコーチという役割が大事かなと考え、今日谷口さんのお話だったり、皆さんのお話を伺ってまた勉強になりました。ありがとうございました。

嶋崎：ありがとうございました。はい、それでは谷口さんお願いします。

谷口：今日は本当にありがとうございました。嶋崎さんからレフェリーの昔の仲間として今日はサロンに呼んでもらって非常に貴重な機会をいただいたと思っています。またサッカーの第一人者である小幡先生のお話を聞けて非常に勉強になりました。ラグビー界は非常に遅れています。自分が現役レフェリーを終わって、コーチに入った時に、サッカー協会さんを訪問させていただきいろいろなことを教えてもらいました。コーチのシステムとか、組織のあり方とか教えていただいて、今はラグビーの育成体制だったりとか、コーチング体制が確立していますので、先ほど小幡さんがおっしゃっていましたけれど、謙遜しないでください。我々のお師匠さんはサッカー協会さんですので。今後ともお願いしたいと申しあげます。今回セミナーに参加させてもらって、本当に私自身ももう一度原点に返ってラグビーを見直すこともできましたし、サッカーとラグビーの共通点これを非常に多く学びました。本当にありがたいと思います。またこのような機会があれば、是非声をかけて貰えば、今度は是非コーチングのところとか、コーチとしてのあり方とか、そういったところももちろん持っていますのでそんなお話もさせていただく機会を持たせてもらえればありがたいなと思っています。中塚さん、嶋崎さん、皆さん本当にありがとございました。また、今後ともお願いします。

嶋崎：ありがとうございました。すみません、コーディネーターが拙いもので途中映像が乱れたり、どんどん画面が進行してしまったりとご迷惑をおかけしました。申し訳ございませんでした。この場をお借りしてお詫びを申し上げます。それでは、今日の公開サロンについてはひとまずここで終わりにしたいと思います。中塚理事長に交代したいと思います。ありがとうございました。

中塚：写真を撮りましょう。といっても私には技がないので柳井さん、若い人はこういうの得意じゃないですか？

柳井：はい、じゃスクリーンショットでいいんですよね。撮ります。ありがとうございます。

中塚：どうもありがとうございます、以上で通算303回月例サロンをお開きにしたいと思います。残れる方は5分後に乾杯しますので飲み物を持ってこのまま待機してください。なお、次回通算304回ですが、2月10日に予定しております。神戸の方でフットサルフェスタを本多克己さんがずっとやっているんですけど、それにアフリカのプロジェクトが絡んで面白いことをやりました。その辺りの紹介があります。またPetix経由でお申し込みください。なお、2022年度の登録に関しては2月中にご案内します。3月が次年度の登録期間、新規入会受付期間です。小幡さん、谷口さん、それから皆さんどうもありがとうございました。5分後に乾杯します。それでは。

一同：ありがとうございました。